

ロンドンオリンピック 2012 女子サッカー競技におけるシュートの傾向分析

コーチング科学研究領域

5011A029-0 黒川 晃

研究指導教員：倉石 平 准教

I. 序論

2011 年の夏に行われた第 6 回 FIFA 女子ワールドカップドイツ大会（以下、ドイツ W 杯）におけるなでしこジャパンの活躍により、注目を集めている女子サッカーではあるが、女子サッカーを対象とするシュートに関する先行研究は第 1 回女子ワールドカップ以降行われていない。また、シュート傾向の男女比較研究（上向ら、1993）から、同じサッカーではあるが、男性を対象としたシュートの傾向の分析結果が女性において全て当てはまるとは限らないと思われる。そこで女性を指導する現場の一助となるために、現在の世界の女子サッカーにおけるシュート傾向を研究、調査したいと考えた。

本研究では、ロンドンオリンピック 2012 女子サッカー競技のシュートシーンに関して、シュートの結果、シュート前の状況、シュートの地点、用いられたキックの種類、及びシュート時間の各項目について分析し、今大会におけるシュートの傾向を把握することを目的とする。

II. 方法

実験の対象となったのは、ロンドンオリンピック 2012 女子サッカー競技の予選リーグ・決勝トーナメントを含む計 26 試合、711 シーンであった。DART FISH Team Pro を使用し、録画されたテレビ放送の映像からシュートが放たれたシーンを抽出し、各分析項目について調べた。

III. 結果及び考察

決勝トーナメント進出チームと予選リーグ敗退チームの比較において 1 試合平均得点数・1 試合平均シュート数の両項目において、決勝トーナメント進出チームが有意に高い値を示した（1 試合平均得点数: $t=2.0351$, $p<0.01$, 試合平均シュート数: $t=2.032$, $p<0.01$ ）。以上より、予選リーグ敗退チームの数値が全体の数値に明らかな誤

差を生じさせるため、予選リーグ敗退チームの数値を除いた決勝トーナメント進出チーム 8 チームのデータを基に本研究の各分析項目について考察を行うこととした。

1. シュートの結果

「枠外両サイド」、「枠内」、「ブロック」の 3 項目が最も多い結果となった。

2. シュート前の状況

準備局面では、得点シーン、シュートシーン共に「遅攻」が最も多かった。ドイツ W 杯での日本やフランスの台頭により、体格・体力重視の傾向にあった女子サッカーがより精度の高い技術が求められるようになってきた（日本サッカー協会、2012）こと、そして 2008～2012 年の男子サッカーの影響（日本サッカー協会、2012）により世界の女子サッカーがポゼッションサッカーになりつつあると考えられる。

アシスト位置では、得点シーンに有意差は認められなかった。シュートシーンでは「中央」が最も多かった。これは UEFA EURO 2012 テクニカルレポート（2012）より FC バルセロナに近いことが分かる。この結果と準備局面の結果から、ポゼッションサッカーになりつつある傾向と言える。

レシーブ局面は、得点シーン、シュートシーン共に「ワンタッチ」が最も多かった。強固に組織され守備のマークが非常に厳しい状況下でボールを長時間保持することが難しいことから、ワンタッチシュートが最も適しており、極力タッチ数を減らすことが重要だと考えられる。

3. シュートの地点

得点シーンでは「PA 中央」、シュートシーンでは「PA 中央」、「中央」が最も多かった。この結果から、ゴールの正面にあたる中央にボールを集めた方が攻撃の多彩化が考えられるため、シュー

トチャンスが増えていると考える。近年における守備の高度化傾向から、最もゴールに近い「GA」にボールを侵入させることが困難であるため、「PA 中央」または「中央」が一番であった。ここから、最終的なシュートの地点がゴール幅内に収まるように突破、侵入する傾向にあると言える。



図1 本稿におけるフィールドの分割

4. 用いられたキックの種類

得点シーンでは、「ヘディング」と「インサイド」が最も多かった。男性を対象としてシュートの傾向分析をした草野の研究（2012）の結果や、準備局面の結果から、正確なキックが蹴れる「インサイド」が多くなったのは仮説通りであった。先行研究（草野，2012）においてヘディングシュートは、「クロス系のラストパスにおいては非常に重要なシュート部位であると言える。また、準備局面におけるヘディングシュートの内訳が以上のような結果（表1）であった。得点シーンにおいては、セットプレーの一つである「CK」や「ポゼッション」から得点につながっている割合が高いことが分かる。

表1 ヘディングシュートの準備局面における内訳

	準備局面	本数	%
得点	CK	7	39
	ポゼッション	5	28
	セカンドボール	3	17
	FK	2	11
	リバウンド	1	5
シュート	ポゼッション	42	35
	CK	42	35
	FK	20	16
	トランジション	8	7
	セカンドボール	6	5
	TIN	3	2

また、2011年に行われたドイツW杯では、全得点によるセットプレーでの得点の割合が

20.9%で、2008年に行われた北京オリンピック（34.2%）より減少していたが、今大会においてセットプレーでの得点は35.6%であり、2008年、2011年の大会より増加していた。

このように、今大会のセットプレーでの得点が北京オリンピック、ドイツW杯より増加したこと、得点シーン、シュートシーン共にポゼッションから最も多く発生している結果、そして表1の結果から、今大会では強固な守備においていかに狭いスペースで相手DFにパスカットされることなくアシストする手段として「浮き球」を使用していたため、ヘディングが得点シーンにおいて多い結果となったと考える。ますます速く組織的そして強固に形成されると予想される守備陣（FIFA，2012）においてポゼッションやセットプレーからの得点は重要になると予想される。

シュートシーンでは、「インステップ」が最も多かった。この結果から狭いスペースでシュートする際に早く強いボールが蹴れる「インステップ」を用いたことが分かる。またこの結果と前述した得点シーンにおける結果（「インサイド」が多い）から、狭いスペースで得点に至るためには、早く強いボールが蹴れる「インステップ」よりも正確なボールが蹴れる「インサイド」が適していることが考えられる。

5. シュート時間

前後半比においては、得点シーン、シュートシーン共に有意差は認められなかった。15分毎に区分けした結果、前半・後半の得点シーン、シュートシーン共に、「1～15」、「16～30」、「31～45」の3項目が「46～」よりも有意に高い値を示した。

IV. 結論

以上の結果から、世界の女子サッカーのシュート傾向は「ポゼッションサッカー」、「強固な守備対策のシュート」の傾向にあると言える。先行研究から本研究は男子サッカーと女子サッカーのシュート傾向が全て一致することはないと仮定して分析を行ったが、本研究の結果から世界の女子サッカーのシュート傾向が男子サッカーのシュート傾向に近づきつつあると言える。

